

会員増強委員会だより

第6回 aaca サロン開催報告

異彩のアートがつくる

モノ・コト・バシヨのあらたな様相

株式会社ヘラルボニー
代表取締役副社長
松田 文登



aaca サロン第6回は、株式会社ヘラルボニー（以下、ヘラルボニー）より、「異彩のアートがつくるモノ・コト・バシヨのあらたな様相」と題して、代表取締役副社長・松田文登さんに登壇いただきました。

ヘラルボニーは福祉を起点に新たな文化を創ることを目指す福祉実験ユニットです。日本全国の主に知的な障害のある作家とアトライセンス契約を結び、アート作品を様々なモノ・コト・バシヨに展開することで、「障害」という言葉がもつイメージの変容に取り組んでいます。

今回のサロンの会場は、ご登壇いただいた株式会社ヘラルボニーが契約する作家の作品・商品展示が行われているBAG-Brillia Art Gallery（東京都中央区京橋）のギャラリースペースをお借りして開催しました。前回同様コロナ感染対策として、リモートによるライブ中継での配信を行いました。会場のギャラリーには、障害のある作家が描く色とりどりのアート作品や、企業とコラボレーションした商品などが並び、大変華やかな風景でした。

今回はその会社の成り立ちから、これまでに組み込まれている事業や展望について語っていただきました。

「障害」＝「欠落」というイメージがまだまだ世間には多い状況です。そうではなく障害を「違い」や「個性」と変換し、事業を通じて障害者の賃金の底上げを図ろうとしているヘラルボニーは、昨今世界的に広まっているダイバーシティ

& インクルージョンを真正面から実践しているように感じました。東京パラリンピックの聖火台や閉会式のプロジェクトマッピングにも採用され、岩手県や福島県のアーティストの作品が大々的に投影されたことがまさに象徴的です。

ひとくちに障害といってもさまざまな障害がありますが、ヘラルボニーでは自閉症や知的障害などのある方たちをビジネスパートナーとして捉え、アートとして流通する仕組みを通じ、あたらしい価値を提供し、その先に障害のイメージの変容を目指されています。障害のある人が自分の力を最大限に発揮できる環境を整えるヘラルボニーの取り組みは、これまでにない価値を創造する取り組みとして大変興味深い内容でした。

また、事業紹介のあとに、今後挑戦したい分野として、地方創生についてお話をいただきました。元気のない地方を福祉・アートの力で再生したいというプランは、今後の地方創生のありかたの新たな切り口として大変示唆的でした。

第6回 aaca サロンは、新規会員のヘラルボニー様をお招きしての会となりました。この機会を通じて aaca の活動をご理解いただくと共に、さらに交流の輪が広がることを期待しています。

（文責：遠藤 貴弘）



アーティストの制作風景



アーティストの作品



ブランド・ライセンス事業のプロダクト・事例